

津軽阿闍羅山周辺の宗教遺跡

関根達人

(1) 霊峰阿闍羅山

青森と秋田との県境、柴森山付近を源とする平川が津軽平野南部の弘前盆地へ流れ出る辺りに、津軽の霊峰阿闍羅山は位置し、晴れた日には山頂から津軽平野が一望できる。標高七〇九mの峰を持ち、五〇〇〜六〇〇mの台地状の山体を呈する阿闍羅山は、今日でこそ大鰐スキー場として知られているものの、その名が不動明王を指す梵語の「アチャラ」に由来することからもわかるように、近世以前においては信仰の山であった。阿闍羅山には「大安国寺」や「阿闍羅千坊」の伝説が残り、かつては山頂付近に礎石らしきものも存在していたというが（『大鰐町史』上巻二一五頁）、ゴルフ場やスキー場の開発が進んだため、今日、中世以前にさかのぼる宗教施設の痕跡を確認することは難しい状況となった。しかし山頂近くの「行者」や「小十和田」、「雨池」といった水源地に残る祠など、江戸時代、修験者による山岳修行が行われていた痕跡が残る。

阿闍羅山の東側、平川に沿って走る国道七号線は、江戸時代の羽州街道であり、十一世紀、北奥建郡の主要ルートとなった「奥大道」とも重なる。阿闍羅山の北側、比内郡から矢立峠を越えてきた「奥大道」が津軽平野にさしかかるその入口付近には、現在も「宿川原」の地名が残る。中世、交通の要衝宿川原は、平賀郡の文化的・宗教的中心地であっ

たと目されている「斎藤一九八六」。

阿闍羅山周辺は、古代末から中世の遺跡・石造物・伝説が津軽地方で最も濃密な地域といえる(第1図)。以下、阿闍羅山周辺の代表的な宗教関連遺跡を紹介し、その特徴について考えることとする。

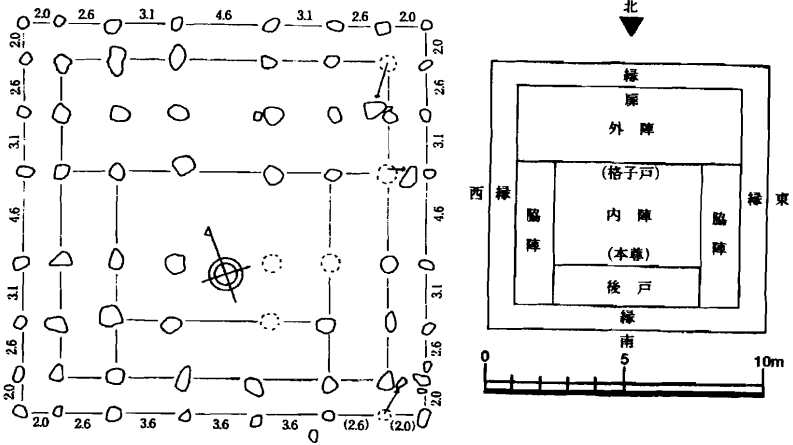
(2) 高伯寺跡

大鰐町蔵館字神岡に旧跡を留める高伯寺は、後白河院の発願により全国に建てられた国分寺に由来し、建久二年(一一九二)、天台僧円智上人によつて神岡山に再興されたとの伝承を有する(『津軽一統志』)。現在寺跡には安山岩と思われる川原石の礎石が残り、佐々木浩一により桁行五間(一六m)、梁間五間からなる仏堂「五間堂」の復元案が提示されている(第2図)〔佐々木二〇〇三〕。発掘調査が行われていないため、寺跡の年代は確定できていない。現在、大鰐町蔵館の大円寺にある丈六の阿弥陀如来坐像(重要文化財)は、地元では古くから「大日様」として人々の信仰を集めてきたが、江戸時代までは「五間堂」の跡が残る旧高伯寺に安置されていたという。この像は、地元産と思われるヒバ材による寄せ木造りで、定朝様式を基本とし、鎌倉初期の制作とされる(第3図)〔大鰐町一九九二〕。大円寺の阿弥陀如来坐像が祀られていた旧大日堂は、明治初年に本尊とともに高伯寺より現在地に移されたというが、高伯寺跡に残る礎石とは間取り・規模が一致しない。旧大日堂は、度重なる改修を受けてはいるが、「慶安四年」銘を有する屋上の宝珠や、大円寺に伝わる元禄十五年(一七〇二)八月吉祥日大円寺慶海法印名のある『真言行人縁起』の記述から、慶安三・四年(一六五〇・五一)、弘前藩三代藩主津軽信義により建てられたことがわかる。高伯寺跡に残る礎石建物跡は、現存する旧大日堂に先行する高伯寺の本堂であり、中世初頭に遡る可能性が大きいのではなからうか。

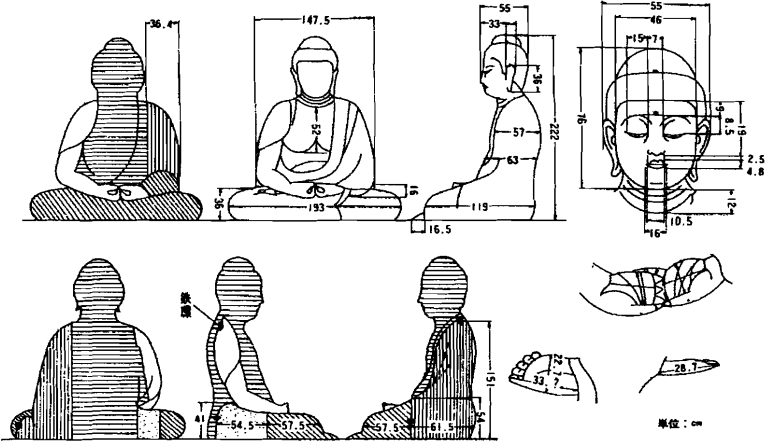


1. 高伯寺跡 2. 堂ヶ平経塚 3. 乳井福王寺跡
4. 三ツ目内阿弥陀堂跡板碑群 5. 岩館五輪堂跡板碑群
6. 大円寺 7. 久渡寺 8. 国上寺(古懸不動尊) 9. 矢立廃寺

第1図 阿闍羅山周辺の宗教関連遺跡と寺院



第2図 大鰐町高伯寺跡の礎石配置と推定される建物の内部構造
(佐々木 2003 より転載)

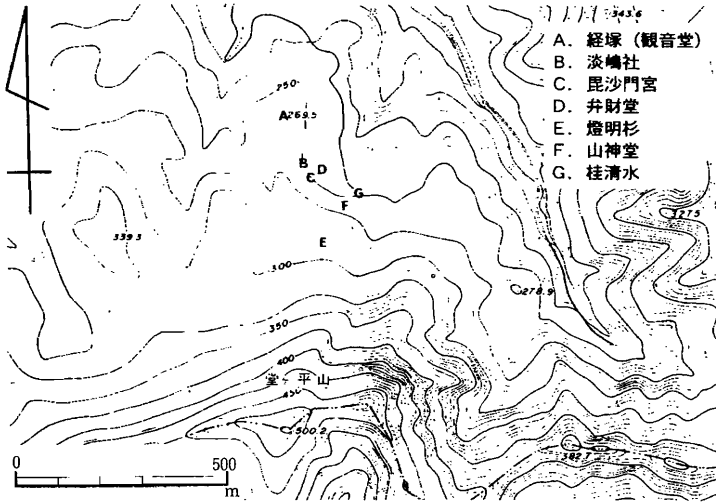


第3図 大鰐町大円寺の重要文化財阿弥陀如来座像の法量と構造
(『大鰐町史』上巻より転載)

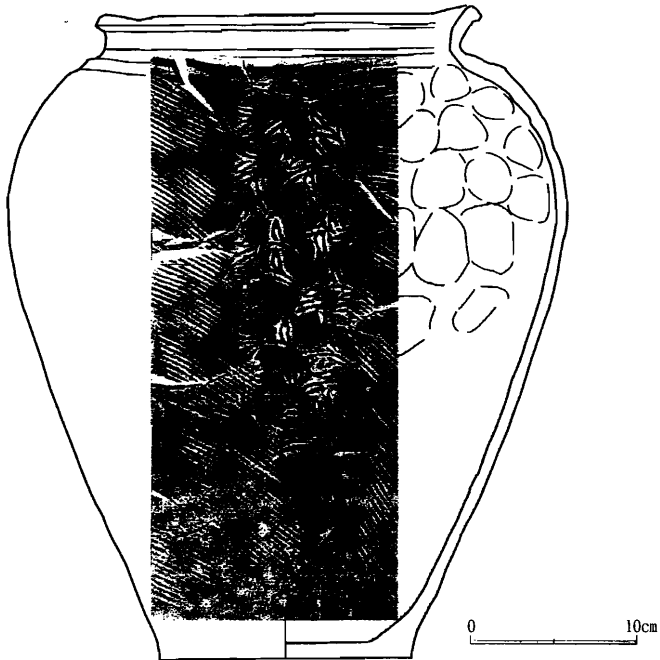
(3) 堂ヶ平経塚

堂ヶ平経塚は、弘前市の中心から南方約八km、標高約五〇〇mの堂ヶ平山北側中腹に位置する。弘南鉄道大鰐津軽大沢駅からは、南におよそ三km、大沢川に沿って沢を遡った先にあたる。経塚は、堂ヶ平山から北へ張り出した尾根平坦面の突端に築かれており、周囲の標高は二六五m程度である(第4図)。「関根二〇〇三」。経塚のある場所は、尾根上平坦面の北東端で、平坦面のなかでは最も高位の場所である。現在、経塚の上には二間四方の観音堂が建っている。観音堂は、直径約六mの円形ないし隅丸方形で、高さ約〇・五mのマウンドの上にある。マウンドの表面には握り拳大から人頭大の川原石が多数露出している。昭和三七年、観音堂の修理中に地元大沢に住む大工の小田桐清氏によって、観音堂の土台石の下から珠洲焼の壺が発見された。土台石の役割を果たしていたのは実は珠洲焼壺の蓋石であり、弘前市南部から大鰐・平賀地域の中世の板碑にも用いられている火砕流凝灰岩(通称「鯖石」)が用いられていた。発見時から、壺の中には火葬骨や焼土・灰などは一切見当たらず、現状で壺の内側を観察する限りにおいても、蔵骨器として用いられた痕跡は全く認められない。経巻こそ残っていないが、珠洲焼壺は経容器の可能性が極めて高い。この壺は紐叩成形技法による中壺で、外面の一部に車輪文もしくは菊花文と思われる裝飾叩打文を有する(第5図)。「関根二〇〇三」。この叩中壺は、その特徴から、珠洲焼吉岡編年I期の中でも終末に近く、十二世紀第4四半期の製作と考えられる。

経塚のある尾根平坦面の南東斜面には明らかに人為的に作り出された平場があり、その下方には毘沙門堂を中心に、淡島社、弁天堂、山神堂などの社殿およびそれに付随する池が点在する広い平坦面が存在する。社殿群の南側隣接地からは、「桂清水」(昭和六三年に「私たちの名水」として県の指定)の名で知られる水が湧きだしている。また、毘沙門堂



第4図 弘前市堂ヶ平経塚周辺の宗教施設



第5図 堂ヶ平経塚出土珠洲焼経容器

の南、斜面上方に位置する市指定天然記念物「燈明杉」は、根周約一三・五m、幹周約六・六m、高さ約三三mの巨木で、樹齢は約七百年と推定されている。「燈明杉」の名は、年に四回定まった日に天からこの木に燈明が降り光を放つとの言い伝えに由来し、地元ではその際の「燈明」の具合により作物の豊凶や家内の吉凶を占ったという。小館衷三は、堂ヶ平を古い修験の地とし、「ここを中心に西に久渡寺の観音、南西に阿闍羅の不動、東に乳井の毘沙門があり、尾根伝い、峠道の上り下りは修行道であつたらしい」と述べている〔小館一九八六〕。堂ヶ平経塚の南東斜面下方に連なる平場には、前述のように現在も毘沙門堂をはじめとする数多くの社殿、清水、古木が残されているが、「桂清水」に関しては、岩手県二戸郡浄法寺町の天台寺に共通する。天台寺同様、堂ヶ平の地においても、水神や山の霊、古木に依る神に対する在来の信仰を基礎に、仏教信仰が展開したのであろう。地元では、江戸時代この場所に市応山金光寺という寺院があつたと伝えられているが、寺の創建年代など詳細は不明である。今後、経塚周辺の測量や発掘調査による検証を必要とするが、経塚との位置関係から見ても、経塚が造られた時期、すなわち十二世紀末葉に、すでにこの場所に天台系の密教に関連した大規模な宗教施設が存在した可能性は高いと推測されよう。

(4) 乳井福王寺

堂ヶ平経塚から北東へ五km、現在の乳井神社付近にあつた乳井福王寺は承暦二年（二〇七八）、白河天皇が「東夷調伏」のため毘沙門天を安置し勅願によつて開いた「東奥無双ノ霊場」とされる〔津軽一統志〕。また、熊野系の修験寺であつた福王寺を再興したとされる十一代社務養寛は、甲斐国から十二坊衆徒を引き連れて来住し、平川流域高二千石の土地を開墾したとの伝承を有する〔新撰陸奥国誌巻第二二〕。福王寺は当初、乳井字古堂にあつたとされ、現在の乳井集落の場所には地藏堂・南蔵坊などの堂塔があつたという。福王寺の名は貞応二年（二二三三）の「僧栄秀寄進状」（岩

大新渡戸家文書以降、史料のなかにも散見され、乳井神社周辺には、鎌倉期のものと考えられている大型の五輪塔や、正安三年（一三〇二）を最古とする二四基もの板碑が残されている他、昭和三二年、至大通寶（一三〇年初鑄）を最新錢とする五四六四枚の埋蔵錢も発見されている〔成田一九三八〕。

(5) 三ツ目内「阿弥陀堂跡」ならびに岩館「五輪堂跡」の板碑群

阿闍羅山の北麓、平川と三ツ目内川の合流点に近い大鰐町三ツ目内字高岡の「阿弥陀堂跡」には、周辺から十数基の板碑が集められている。年号の判明するものは、正応二年（二二八九）の一基を最古に、正応四年（二二九二）が二基、正応六年（二二九三）が一基、正安四年（一三〇二）が一基と、十三世紀末から十四世紀初頭に集中する。正応四年銘の板碑にその名が刻まれた西心は、後述する平賀郷の地頭代曾我廣忠の子息で、平賀本郷岩楯村の地頭代であった曾我五郎次郎惟重の法名である。この場所は中世の寺院跡と伝えられるが、平川を挟んで宿川原と近接しており、宿川原の構成要素の一つといえる。

福王寺のあった乳井から北西へ約二km、中世平賀郷の地頭代曾我氏が拠点とした平川市岩館の「五輪堂跡」には五基の板碑が残されており、うち三基には十四世紀前半の年号が刻まれている。史料上、曾我氏が北条氏の地頭代として平賀郡に入部したのを確認できるのは、「北条義時袖判下文」（新渡戸家文書）であり、それは建保七年（二二一九）、曾我廣忠の時のことである。

「阿弥陀堂跡」や「五輪堂跡」に残る板碑群は、阿闍羅山の北側、津軽平野の喉元にあたるこのエリアが、十三世紀以降、得宗北条氏と被官関係を結んだ地頭代津軽曾我氏が治める中世平賀郡の中心地になったことを物語っている。

(6) 阿闍羅山信仰と津軽の「内国化」

平川市(旧南津軽郡平賀町)鳥海山遺跡出土の「大佛」の文字を刻んだ須恵器杯や、青森市細越遺跡・同朝日山(1)遺跡・つがる市(旧木造町)石上神社遺跡から出土した「寺」の墨書を有する土師器坏などの考古資料から、津軽地方には、集落が爆発的に増加する九世紀末から十世紀中頃に、仏教文化の第一波が到達したと考えられる。

これに続く所謂「防御性集落」が盛んに営まれた十世紀後半から十一世紀には、鉄製の錫杖や鏡鈴など修験との関連性を示唆する遺物が出土するようになるが、その分布は、南津軽郡から青森市にいたる津軽平野の東半部に偏る。それは、平賀・田舎・山辺を通り、外浜へ抜ける当時の主要幹線道沿いの地域である。例えば、阿闍羅山の東麓、大鰐町長峰の砂沢平遺跡第13 B号竪穴住居跡からは、一〇点程の木製椀とともに鉄製三鈷鏡や錫杖状鉄製品が、阿闍羅山とは関係の深い猿賀神宮寺近くの平川市(旧尾上町)猿賀字明堂の五輪野遺跡では、鉄製三鈷鏡や鉄製の長柄に銅製の柄が付く柄香炉が出土している。鏡は法会に用いる楽器の一種で、通常銅製である。鉄で作られたものは、これまでのところ他に栃木県日光市中宮祠に所在する男体山山頂遺跡出土事例が知られるのみである。男体山は勝道上人開山の霊山であり、山頂に営まれた遺跡は、仏教色の強い山岳信仰に基づく祭祀遺跡である。日光男体山山頂遺跡に類例を求めるような遺物が阿闍羅山周辺の遺跡に見られることは、阿闍羅山が平安時代後期には山岳信仰の霊場であったことを物語っている。

阿闍羅山の南方、矢立峠を越えた秋田県大館市白沢には、豊富なカワラケや白磁四耳壺の出土から平泉との関係が指摘される、十二世紀後半の礎石建物跡が検出された矢立廃寺がある。阿闍羅山周辺に残る宗教遺跡のうち、十二世紀末に営まれた堂ヶ平経塚や高伯寺は、おそらく阿闍羅山・矢立峠をはさんで対峙する矢立廃寺同様、平泉政権との

関わりなしには存立し得ないものであり、それらは津軽地方の「内国化」において「北門鎮護」的役割を担った記念物と位置づけられよう。

津軽では中世陶器窯跡が発見されておらず、出土する須恵器系陶器も基本的に珠洲焼の範疇で理解される。津軽地方から出土するⅠ期の珠洲焼は数量的に限られるが、経容器として用いられた堂ヶ平の叩中壺や西津軽郡鯉ヶ沢町赤石出土の経筒の他、蔵骨器として使われた四耳壺が特徴的である¹⁾。十二世紀後半、経筒や蔵骨器といった宗教用具を中心とする珠洲焼がどのような経路で津軽地方に入つて来たのか確定できてはいない。しかし、米代川・雄物川水系を軸とする羽後北部を中心にエヒバチ長根窯の製品が分布する状況から見ても、能代で陸揚げされたものが陸路比内地方を通り矢立峠を越えて運ばれてきた可能性は低いと思われる。また、八重樫忠郎が指摘するように、「平泉セット」は十三湊よりも陸奥湾側に多く「八重樫二〇〇二」、外浜に位置する内真部遺跡や、津軽平野から外浜へ抜ける要衝に当たる浪岡城跡内館（浪岡館）では、「平泉セット」とともにⅠ期の珠洲焼が出土している。津軽平野から出土するⅠ期の珠洲焼は、主として外浜で陸揚げされたものではなからうか。

阿闍羅山には、高伯寺をはじめ、古懸不動尊の名で知られる碓ヶ関村の国上寺や、津軽における観音信仰の中心地である弘前市小沢の久渡寺の前身となる寺院が存在していたとの伝承がある。現在天台寺の本尊として祀られている菩薩形座像同様、高伯寺の阿弥陀如来座像が、その像容にもかかわらず、人々から大日様として信仰されてきた点を重視すれば、十一世紀頃から岩手県浄法寺町の天台寺、同安代町の「だんびる長者伝説」²⁾地、秋田県鹿角市の大日靈貴神社、比内町独鈷大日堂を結ぶ地域に展開していたと考えられている大日信仰がこの地にも到達し、山岳信仰とともに阿闍羅山信仰の古層をなしていた可能性も否定できない。高橋富雄は、「大日道」が天台寺を発し津軽街道沿いに岩木川河口の十三湊へ通じていたと説くが「高橋一九八二」、鉄製の錫杖や鐺鈴など仏教関連遺物の分布状況を見る限り、

十世紀後半から十一世紀、「布教の道」は、岩木川沿いに進むのではなく、阿闍羅山の麓から津軽平野の東縁部を通り外浜に抜けている。この地域の蝦夷社会が物心両面で「内国化する(される)」過程で、すでに内国化した地域との接点に位置し、津軽平野から外浜までを一望できる阿闍羅山は、津軽地方の蝦夷社会に向かって宗教的メッセージを発信するのに格好の霊地であつたのではなからうか。今後、阿闍羅山周辺の考古学的調査が進展することを期待したい。

註

(1) 珠洲焼の四耳壺が蔵骨器として使用されている例は、青森市(旧浪岡町)源常平遺跡、平川市(旧平賀町)杉館跡、田舎館村樋口(1)遺跡などで確認される。

(2) 貧しい夫婦が蜻蛉(だんびる)の夢を見て、酒泉を探し当てる長者となる。やがて天皇の后となった長者の娘は、父母の死後、そこに大日堂を建立するという伝説。高橋富雄は、「だんびる」長者という名前自体、大毘盧(大日霊)すなわち大毘盧舎那仏たる大日に由来すると説く〔高橋一九八二〕。

引用・参考文献(紙幅の関係上、発掘調査報告書は載せていない)

- 大罇町 一九九一年『大罇町史』上巻
- 工藤清泰 一九九四年『古代末・中世初期の北奥』、『歴史評論』五三五号 三二一〜四六頁
- 二〇〇〇年『耳と音―耳皿と錫杖の考察―』、『村越潔先生古稀記念論文集』二三八〜二五二頁
- 小箱衷三 一九七二年『堂ヶ平考』、『うとう』七八号 三六〜三九頁
- 一九七三年『津軽藩政時代に於ける生活と宗教』津軽書房
- 一九八六年『青森県の民間信仰』北方新社
- 齊藤利男 一九八六年『境界都市平泉と北奥世界』、『東北古代史の研究』四六一〜四九四頁
- 佐々木浩二 二〇〇三年『高伯寺跡』、『青森県史』資料編考古四 一六〇・一六一
- 関根達人 二〇〇三年『弘前市堂ヶ平経塚出土の珠洲焼経容器とその意義』、『東奥文化』七五 六七〜七四頁
- 高橋富雄 一九八二年『天台寺文化の周辺』、『天台寺研究』三 一〜四〇頁

- 東北中世考古学会 二〇〇三年『中世出羽の諸様相―寺院・生産・城館・集落―』
成田末五郎 一九三八年『津軽地方発掘古銭の研究』『青森県郷土誌料集』第二輯
弘前市 一九九五年『新編弘前市史』資料編一
二〇〇三年『新編弘前市史』通史編一（古代・中世）
八重樫忠郎 二〇〇一年『東北における中世初期陶磁器の分布』『都市・平泉―成立とその構成―』日本考古学協会二〇〇一年度盛岡大会研究発表資料集 六七〜七六頁
吉岡康暢 一九九四年『中世須恵器の研究』吉川弘文館